

## 『平家物語』のナラトロジーに関する一考察

マイケル ワトソン

『平家物語』の巻9において越前の三位通盛の死が「落足」と「小宰相身投」に二回叙述される。つまり「落足」では語り手が描写し、「小宰相身投」では通盛の侍、時員が北の方小宰相に報告するという形で描写されている。それも二回全く同じ描写を繰り返すのではなく、通盛の死をそれぞれ少しずつ異なる側面から描写している。「小宰相身投」における時員による通盛の死の報告には時員の主観が多く入っており、何故主人と死を共にしなかったかについての弁解が読みとられる。一方小宰相は通盛の死の報せを聞いて、夫通盛との最後の会見を思い出し、乳母にその時のことを語る。

「…あすうち出でんとての夜、あからさまなる所にてゆきあひたりしかば、いつよりも心ぼそげにうちなげきて、『明日のいくさには、一定うたれなんずとおぼゆるはとよ。我いかにもなりなんのち、人はいかがし給ふべき』なんどいひしかども、いくさはいつもの事なれば、一定さるべしと思はざりける事のくやしきよ。それをかぎりとだに思はましかば、などのちの世とちぎらざりけんと、思ふさへこそかなしけれ。…」(巻9「小宰相身投」2:245)

小宰相は更に通盛に子を身ごもっていると、うち明けた時の様子を思い出して語る。その語りの中において、通盛の言葉を直接話法で語る。小宰相は「あすうち出でんとて…」と「あす」という日時を表す言葉を使う。この日は言うまでもなく通盛が一谷で討死する日である。この語りは回想によって成り立っているが、通盛と小宰相、二人の最後の逢瀬の様子は、このエピソードより以前、その実時間においての出来事として巻9「老馬」にすでに簡単に描かれている。

通盛卿は能登殿の仮屋に北の方むかへ奉って、最後のなごり惜しまれけり。能登殿大きにかって「…(中略)…ましてさ様にうちとけさせ給ひては、なんの用にかたたせ給ふべき」といさめられて、(通盛)げにもと思はれけん、いそぎ物具して、人(小宰相)をばかへし給ひけり。(巻9「老馬」2:201)

ここに言う「仮屋」は小宰相の回想語りの中では「あからさまなる所」と表現され、語り手

の言葉と登場人物の言葉は明白に相違している。同じ場面が異なる観点から描かれている訳である。「老馬」では通盛の弟能登殿（教経）が通盛の行動を批判する。「最後のなごり惜しまれけり」という表現はこの夫婦がもう二度と会うことがないということを示唆する。通盛の覚悟は後の小宰相の回想に語られる「いつよりも心ぼそげにうちなげきて」という表現などから明らかであるが、「我いかにもなりなんのち、人はいかがし給ふべき」という通盛自身の言葉は、通盛の死後、小宰相の回想語りの時点でこそ重要なものとなってくる。小宰相は生き延びて子供を産むべきかどうかの判断をせねばならないからである。出来事は通時的に語られるのではなく、回想という形を取って、過去の出来事として述べられているのであるが、そのような時間操作の効果がよくでている場面であり、物語の時間を問題としていくときに興味深いといえる。しかしここで注目したいのは時間の問題よりも、むしろ「焦点」の問題である。

「焦点」とは focalization というナラトロジー研究における専門用語の訳語である。狭義には「視点」(point of view)という概念で捉えられるものではあるが、ナラトロジー研究においてはさらに広い範囲の概念を含むもので、焦点という語を使っておきたい。もちろん焦点の問題について考える場合、多くは「誰が見ているのか(誰の視点か)」ということが議論の中心となるのはいうまでもない。

先に「仮屋」と「あからさまなる所」の二つの表現について触れ、「異なる観点」という言葉で説明したが、「あからさまなる所」という表現は焦点人物としての小宰相の内的感情からくる表現と言えよう。一方「仮屋」という表現は語り手の言葉であり、客観的な描写である。ナラトロジーの観点から言って語り手は第一次焦点主体(primary focalizer)として位置づけられているが、そのような概念に従えば小宰相はこの場合第二次焦点主体(secondary focalizer)ということになる。本論においては論点を明確化するために“focalizer”の訳語として「焦点主体」の語を使っておく。

さて「老馬」からの引用部分に「げにもと思はれけん」とある点に注目してみたい。通盛は弟能登殿に叱責され、まさに弟の言う通りだと、小宰相を送り返す。「思はれけん」は第一次焦点主体(primary focalizer)が通盛の行動の理由を推測して叙述しているということを示す。『平家物語』ではこのような表現が焦点の移動を見極める一つの指標となり得ている。

小説家ヘンリー・ジェイムズ(1843-1916)は自分の作品の前書きで視点の問題に触れ、作者は視点人物を決定する自由を持つと述べた。これは小説を第一人称で書くか、第三人称で書くかという問題に収斂しがちであるが、誰が語っているのか(「私」か「彼/彼女」)よりも、誰が見ているのかということの方がナラトロジー研究にとって、より本質的な問題であるといえよう。ヘンリー・ジェイムズが近代小説における視点の統一性の重要性を説き、それが文芸研究における全く新しい観点として大きな注目をあびたのはここで繰り返すまでもない

ことであろう。だが作者が意識していたにしろ、しなかったにしろ、例えばヘンリー・ジェイムズより前の時代のイギリスの小説家ジェーン・オースティン(1775-1817)は『高慢と偏見』などですでに統一的視点をもって物語を展開していた。しかもこの作品においては女主人公の「偏見」に満ちた視点が展開の鍵となっている。しかしまたオースティンからジェイムズに到るヨーロッパ近代小説の大半が、統一した視点によって書かれたという訳ではないというのも周知の事実であろう。ジェイムズはどのように小説を書くべきかということを目指すのであるが、ナラトロジー研究の目的は物語がどのように書かれているか(或いは語られているか)にある。ナラトロジー研究においては「何が」ではなく「いかに」が分析の対象となる。

Focalizationの訳語として「視点」という語を当てるのを避けるのは、一つにはこの言葉が作品に反映された作者の物の見方を指す時にも使われるからである。また一つには視覚だけが問題となるのではなく、聴覚など他のものも関わってくるからである。義経が御所の守護に駆けつける、次のような場面に注目してみたい。

大將軍九郎義経、軍兵どもにいくさをばせさせ、院の御所のおぼつかなきに、守護し奉らんとて、まづ我身共にひた甲五六騎、六条殿へはせ参る。御所には大膳大夫業忠、御所の東の築垣のうへにのぼって、わななくわななく見まはせば、白旗ざっとさしあげ、武士ども五六騎のけ甲にたたかいなつて、射むけの袖ふきなびかせ、黒煙けたててはせ参る。業忠「又木曾が参り候。あなあさまし」と申しければ、「今度ぞ世のうせはて」とて、君も臣もさはがせ給ふ。業忠かさねて申しけるは、「只今はせ参る武士どもは、笠じるしのかはつて候。今日都へ入る東国の勢と覚え候」と、申しもはてねば、九郎義経門前へ馳せ参つて、馬よりおり門をたたかせ、大音声をあげて、「東国より前兵衛佐頼朝が舍弟、九郎義経こそ参つて候へ。あけさせ給へ」と申しければ、業忠あまりのうれしさに、築垣よりいそぎをどりおるとて、腰をつき損じたりけれども、いたさはうれしさにまぎれておぼえず、はふはふ参つて、此由奏聞しければ、法皇大きに御感あつて、やがて門をひらかせていれられけり。(巻9「河原合戦」2:171-2)

ここではまず起こっている事柄が客観的に説明されている。読者/聞き手は義経がやってくるのを知る。義経らの動きが二度にわたって描写される。まず「我身共にひた甲五六騎、六条殿へはせ参る」と第一次焦点主体によって簡潔に表すが、第二次焦点主体である業忠からは「白旗ざっとさしあげ、武士ども五六騎のけ甲にたたかいなつて、射むけの袖ふきなびかせ、黒煙けたててはせ参る」と詳しく描く。業忠の恐怖心が反映している。業忠は近づいてくるのが木曾義仲らだと勘違いしている。前述したように読者/聞き手はもちろんこれが義経らだと知っている。ここに劇的アイロニーが生じる。

「又木曾が参り候。あなあさまし」と「只今はせ参る武士どもは…」という二カ所の業忠の言葉の間に時間差がある。業忠が次の「只今はせ参る武士どもは…」という言葉を発する頃には義経らの距離は大分縮まっている。この時には業忠は笠じるしを認めることができ、近づいてくるのは木曾義仲らではなく、「東国の勢」だと認識するのだが、業忠には依然として近づいてくるのが誰なのかははっきりとはわからない。義経が名乗って、はじめてそれと知るという展開である。

つまりこの用例から分かるように、焦点人物の目に映ることだけではなく、また耳に入ってくることも場面描写に含まれているのである。しかし繰り返すが、依然として焦点の問題については多くは「誰が見ているのか（誰の視点か）」ということが議論の中心となり、これが基本でもある。

次のような灌頂巻「大原御幸」の例をみてみたい。ここでは後白河院の大原訪問が語り手の客観的な描写を通して描かれるのではない。焦点人物は後白河院である。つまり、語り手は後白河院の視点に映っているであろう情景を叙述するのである。

女院の御庵室を御覧ずれば、軒には蔦藿はひかかり、信夫まじりの忘草、「瓢箪しばしばむなし、草顔淵が巷にしげし。藜蓼ふかく鎖せり、雨原憲が樞をうるほす」ともいっつべし。杉の茸目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、もる月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。(灌頂巻「大原御幸」2:511-2)

「女院の御庵室を御覧ずれば」という表現は後白河院が「女院の御庵室を」見ているという状態の語り手からの描写ではある。が、例えば次に続く「軒には蔦藿はひかかり、信夫まじりの忘草、瓢箪しばしばむなし、草顔淵が巷にしげし」は後白河院の目に映った光景が描かれている。語り手（第一次焦点主体）は「女院の御庵室の様子は、軒には蔦藿はひかかり…」というふうに叙述を展開することも出来るのである。「瓢箪しばしばむなし、草顔淵が巷にしげし」は漢詩からの引用であり、このような文学的表現が後白河院によってなんらかの形で示されたという訳ではなく、これはむしろ作者による虚構と考えてよい部分なのであるが、とにかく重要なことは、後白河院の視点を取り入れているかのように表現されているということであろう。この「御覧ずれば」というような表現は焦点人物を示唆する一つの指標といえよう。つまり、ここでは焦点が後白河院に移ったということが、「御覧ずれば」という表現の存在によって明白となる。だがこのような指標を伴わない場合も多い。

法皇「人やある、人やある」と召されけれども、おんいらへ申す者もなし。はるかにあつて、老い衰へたる尼一人参りたり。(灌頂巻「大原御幸」2:512)

後白河院は寂光院に到着する。「はるかにあって、老い衰へたる尼一人参りたり」とある。焦点人物はやはり後白河院である。つまり語り手はこの尼が誰かを知っているが、読者或いは聞き手は、この尼のことを誰であったのかと認識できない後白河院の立場から、この場面を経験する。この場合も語り手（第一次焦点主体）は「老い衰へたる尼一人参りたり」と表現するかわりに、「阿波の内侍参りたり」ということもできる訳である。ここには先の例のように「御覧ずれば」というような指標はない。この尼の例のように語り手がある登場人物の名前をすぐには明らかにしないという例は他にも数多くあり、それぞれの場面においてその機能は様々である。だが多くは読者/聞き手の共感を呼び起こすという機能を持つ。

同じく登場人物の正体がすぐには明らかにされない次のような例を見てみよう。

しばしあって、黒革威の鎧着て月毛なる馬に乗ったる武者一騎、はせ来る。越中前司あやしげに見ければ、「あれは則綱がしたしう候人見の四郎と申す者で候。則綱が候を見て、もうでくと覚え候。苦しう候まじ」といひながら、あれがちかづいたらん時に、越中前司にくんだらば、さりともおちあはんずらんと思ひて待つところに、一段ばかりちかづいたり。越中前司はじめは二人を一目づつ見けるが、次第にちかうなりければ、馳せ来る敵をはたとまもって、猪俣を見ぬひまに、力足をふんでつい立ちあがり、ゑいといひてもろ手をもって、越中前司が鎧のむないたをばくつついて、うしろの水田へのけにつき倒す。(巻9「越中前司最期」2:225)

「武者一騎」がやってくるのを越中前司が認める。つまり越中前司は見知らぬ敵が近づいてくるのを見る訳である。一方、猪俣小平六則綱は越中前司に捕らわれているのであるが、ここに「武者一騎」、則綱の味方がやってくるのを見る。ここに焦点の移動がある。則綱は自分の目に映る状況を「あれは則綱がしたしう候人見の四郎と申す者で候」と言葉にするが、そのことにより越中前司にとっては名前のない「武者一騎」であった人物が、「人見の四郎」という則綱の友人であることが明かなる。次に則綱の心中思惟があり、人見四郎が近づいてきたら越中前司に逆襲しようと考えているということが明かされる。言うまでもなく、心中思惟は焦点化の一形態である。この則綱の心中思惟に続いて「一段ばかり近づいたり」という一文が挿入されている。これは客観的な状況の描写であると同時にまた越中前司、則綱の二人の視点からの叙述であるとも解釈できる。次に焦点はまた越中前司へと戻る(「越中前司はじめは二人を一目づつ見けるが」)。焦点の移動がこの場面の緊張感を高め、読者/聞き手を物語場面に引き込んでいく。

みてきたように『平家物語』は統一した一つの視点から描かれている作品ではない。ほんの2、3行という短い叙述においても焦点が移動している。そしてその変化の様相、また変化の原因、変化の効果は興味深い。それぞれのエピソードは誰のものなのか、誰のためのもの

のなのかということが、焦点の移動の詳細な分析によってより明確化されるのではないであろうか。

今回はあまり深く分析をしなかったが、第一次焦点主体と地の文の関わりなど、まだまだ考えなければならない問題が多くある、しかも焦点の分析はナラトロジー研究のほんの一部でしかないと言える。他に会話文を中心とした「話法」、「物語時間」の分析など多彩かつ包括的なアプローチが残されている。

#### 参考文献

- Bal, Mieke. *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative*. Trans. Christine van Boheemen. Second Edition. Toronto: University of Toronto Press, 1997.
- Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. Second Edition. Chicago and London: University of Chicago Press, 1983.
- de Jong, Irene J. F. *Narrators and Focalizers: The Presentation of the Story in the Iliad*. Amsterdam: B. R. Grüner Publishing, 1989.
- Genette, Gérard. *Narrative Discourse: An Essay in Method*. Trans. Jane E. Lewin. Ithaca: Cornell University Press, 1980.
- James, Henry. *The Art of the Novel: Critical Prefaces*. Boston: Northeastern University Press, 1984.
- Prince, Gerald. *A Dictionary of Narratology*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1987.
- Rimmon-Kenan, Shlomith. *Narrative Fiction: Contemporary Poetics*. London and New York: Routledge, 1983.

原文の引用は市古貞次校注、訳『平家物語』（新編日本古典文学全集）による。